

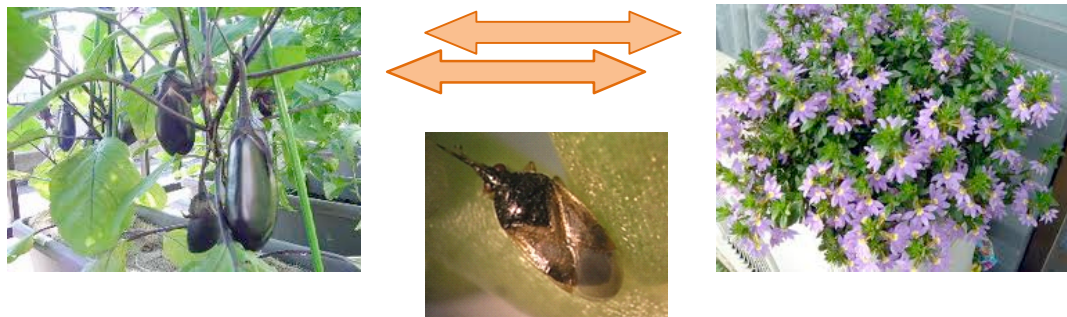
捕食性天敵ヒメハナカメムシ *Orius* の餌メニュー解析

三浦一芸・安部順一郎・世古智一（近中四農研センター）

化学農薬の使用量を減らして野菜生産環境における生物多様性を維持し、これを活用することで持続的・安定的な野菜生産を地域で推進していかなければならない。この推進には生物機能を利用する害虫防除法の確立が急務を要する課題である。特に、土着天敵の利用技術開発は生態系への影響が少なく、コスト的にも安価であり強く普及が望まれている。そのため、土着天敵がほ場において防除対象となる害虫を好んで捕食しているかどうかの確認が重要となる。これまで、捕食の確認はほ場での長時間の観察以外、確実な方法がなく、害虫と天敵の発生推移から推定せざるを得なかった。しかし、種特異的な DNA 塩基配列（ミトコンドリア DNA など）の解析により天敵の捕食歴を調査できる手法が開発されてきた。そこで、露地や非閉鎖環境の施設での土着天敵利用技術開発として、有効な土着天敵を探索するための害虫の DNA マーカー作製と捕食性天敵からの抽出法開発を試みている。

また、最近特定の植物が土着天敵を温存・増強することが明らかになってきた。その植物を農作物の周囲に栽培して土着天敵を農作物の害虫防除に利用する試みが行われている。本当に特定の植物と農作物の間を行き来しているのかを確かめるにも植物の DNA マーカーを作製して検討した。

ここでは捕食性土着天敵としてヒメハナカメムシ類を対象に捕食者としての評価および植物間の移動分散についての検討を行ったことを紹介する。



1. ヒメハナカメムシは何を食べているのか？
2. ヒメハナカメムシは温存・増強する植物から主要作物へ分散しているのか？